

グライス「会話の含意」より見た英語リーディング過程  
—Flouting the Maxim of Quality に関して—

千々岩佳史

1. はじめに

私は本稿において、リーディング過程に重要な関連性を持つと考えられる、グライス「協調の原則 (Cooperative Principle; CP)」および「格率 (Maxims)」から導きだされる「会話の含意 (Conversational Implicature)」のうちとくに「質の格率の違反 (Flouting the Maxim of Quality)」に関して、これがどのようにテキスト内に具現されるかを、"incongruity"、および "hedges" という表現法を中心に述べ、ついでこのようなテキストの「読み」ということを考察したい。

なお、私はすでにグライス「会話の含意」における「量の格率 (Maxim of Quantity)」の違反とリーディング過程との関連性について考察を行っている (千々岩、1998)。したがって、本稿は、その続論という性格を持っている。テーマの設定上、記述の重複は当然考えられるが、できるだけこれを避けるように努めた。

2. 「格率」とは何か

グライスによって与えられた、量 (Quantity)、質 (Quality)、関連性 (Relation)、様態 (Manner) の「格率 (Maxims)」とその下位区分は、以下の4箇条であった (Grice, 1975. pp. 45-46)。

QUANTITY (the quantity of information to be provided)

1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
2. Do not make your contribution more informative than is required.

QUALITY

Try to make your contribution one that is true.

1. Do not say what you believe to be false.
2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

RELATION

Be relevant.

MANNER (relating not --- to what is said but, rather, to HOW what is said is to be said)

1. Avoid obscurity of expression.
2. Avoid ambiguity.
3. Be brief (avoid unnecessary prolixity).
4. Be orderly.

(大意)

量の格率 (与えられるべき情報の量)

1. 自分の発話において (当面の話のやりとりの目的に応じて) 必要なだけの情報量をできるだけ多く与えるようにすること。
2. 自分の発話において不必要な情報は与えないようにすること。

質の格率

発話はできるだけ真実であるようにすること

1. 偽りと信じていることは言わないこと。
2. 十分な証拠に欠けることは言わないこと。

関連性の格率

会話において当面の話題に関連のあることだけ言うこと。

様態の格率 (話す内容ではなく、話す内容をいかに述べるかの方法に関わる)

1. 表現において不明瞭さを避けること。
2. あいまいさを避けること。
3. 簡潔であること (不必要な冗長さを避けること)。
4. 順序正しく、整然と言うこと。

これらの「格率」は、通常の会話において、会話が効率よく首尾一貫して行われるために、遵守されることが期待されている原則 (principle) である。グライスはこれを、「協調の原則」と名づけ、この原則は次のような、いわば命題から導きだされている。

Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged. (ibid., p. 45)

(大意)

会話における自分の発話を、行われている会話の場面で、話のやりとりの中で暗々の内に同意されている目的や方向に必要とされるようにすること。

そして、留意せねばならないことは、'conversational contribution' となっているが、「会話」に限ったことではない。書き言葉におけるリーディングにおいても、同じことが言えるのである。これが、本論の眼目である。

では、「格率」とは人間の言語使用にたいしてのみ適用されるものであろうか。グライスは言語使用のみならず、人間の日々の生活に関わる、あらゆる場面にも格率は生きているとしている。そして以下のような平易な例をあげている (ibid., p. 47)。なお、格率の遵守と英語リーディング過程の基本的関係についての論考には千々岩 (1991) がある。

1. **Quantity.** If you are assisting me to mend a car, I expect your contribution to be neither more nor less than is required; if, for example, at a particular stage I need four screws, I expect you to hand me four, rather than two or six.

2. **Quality.** I expect your contributions to be genuine and not spurious. If I need sugar as an ingredient in the cake you are assisting me to make, I do not expect you to hand me salt; if I need a spoon, I do not expect a trick spoon made of rubber.

3. **Relation.** I expect a partner's contribution to be appropriate to immediate needs at each stage of the transaction; if I am mixing ingredients for a cake, I do not expect to be handed a good book, or even an oven cloth (though this might be an appropriate contribution at a later stage).

4. **Manner.** I expect a partner to make it clear what contribution he is making, and to execute his performance with reasonable dispatch.

(大意)

1. 量の格率。 私が自動車の修理を手伝ってもらっている場合、その手伝いは必要とされるよりも多くもなく少なくもない、適度なものを期待しているのである。たとえば、もし、ある場面で、4個のネジが欲しいとき、4個のネジを手渡して欲しいのであって、2個でも6個でもない。

2. 質の格率。 手伝いは誠実であって、見せかけのものであって欲しくない。私がケーキ作りを手伝ってもらっている場合、材料として砂糖が必要のときに塩を手渡されることは予想しないし、スプーンが入用のときに、ゴムで作ったオモチャのスプーンを渡されることは期待していないのである。

3. 関連性の格率。 相手の手伝いは事のそれぞれの段階で必要に応じたものであって欲しい。私がケーキの材料を混ぜている場合には、(料理についての) 最良の書物やオープンクロスなどを手渡されることは予想していないのである (あとの段階では必要なことがあっても)。

4. 様態の格率。 相手は自分の行っている手伝いが何であることを明確に理解し、てきぱきと事を運んでくれることを予想しているのである。

では、私たちの言語生活を含む日々の生活のあらゆる側面において、格率はこのように的確に機能しているのであろうか。そうではない。人間の精神活動はきわめて複雑である。ひとすじなわけではない。格率は常に遵守されているわけではない。格率の違反 (flout) は日常のことである。

格率が違反された場合にはどのようなことが言えるのであろうか。

### 3. 「質の格率」の違反

「質の格率」を今一度あげる。

#### QUALITY

Try to make your contribution one that is true.

1. Do not say what you believe to be false.
2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

(大意)

## 質の格率

発話はできるだけ真実であるようにすること

1. 偽りと信じていることは言わないこと。
2. 十分な証拠に欠けることは言わないこと。

現実世界の言語活動において、話し手（書き手）は、さきの「質の格率」を誰にもすぐそれとわかるように (blatantly)、ある意図も持って違反(flout)することがしばしばある。そして、この違反によって創出 (generate) された話し手（書き手）の含意を「会話の含意」とするのである。たとえば、下位区分、

1. 偽りと信じていることは言わないこと。

において、

- 1a. 偽りと信じていることを言う。

とどうなるか。それは、「ウソ」になるのである。したがって、

- 1b. (発話の時点で) 偽りと信じていないことを言う。

と、それは結果的に偽りであると判明しても、「ウソ」とはならないのである。

しかしながら、このことは、あくまでも論理上のことである。現実の「質の格率」の違反と「会話の含意」はまったく異なった様相を示す。Thomas (1994, pp. 754-55) が与えている「会話の含意」の例を見してみる。(以下、日本語の大意はできるだけ省略する)

ロンドンである人 A が、友人 B と車を置いていた場所に戻ると、交通係警官が違法駐車として、車が動かないように車輪止め (wheel clamp) をはめてしまっていた。A は B に向かって次のように発話したとしたら、どう考えればいいのか。

- (1) A: Great, that's just what I wanted!

この場合、A はこのような場面で当然予期されるのとは、まったく異なる偽りの発話をしているのである。つまり、「質の格率」に違反しているのである。そして、「会話の含意」が創出される。A は B に「ウソ」を言う意図は毛頭ないのであるから、B は A の「会話の含意」を推定、ないし算出 (calculate) しなければならない。それは、概略、次のような過程をたどるといえよう。

- (a) A has expressed pleasure at finding his car clamped.
- (b) No one, not even the most jaded masochist, is likely to be pleased at finding his car clamped.
- (c) His passenger (=his friend) has no reason to believe that A is trying to deceive him in any way.
- (d) Unless A's utterance is entirely pointless, he must be trying to put across to his passenger some other proposition.
- (e) This must be some obviously related proposition
- (f) The most obviously related proposition is the exact opposite of the one he has expressed.
- (g) A is extremely annoyed at finding his car clamped.

つまり、話し手 A は、車輪止めをはめられた現実にたいして本当に困ってしまったことを「会話の含意」として発話しているのである。つまり、「質の格率」に違反することにより、自分に真意をのべているのである。では、書き言葉によるリーディング過程と「会話の含意」との関係はどのようなものであろうか。

#### 4. 「会話の含意」 vs. リーディング過程

「質の格率」の違反によって生じる「会話の含意」を内在させているテキストには、どのようなものがあるのだろうか。様々なスタイルのテキストがありえようが、最も顕著な特性が具現されているテキストはおおまかに見て2種類あると言っていいであろう。まず、テキストの内容に首尾一貫性と結束性 (coherence) を欠く場合であり、次いでテキスト自体が断定的でなく明瞭さに欠けるスタイルを持つことである。前者は "incongruity"、後者は "hedges" と呼ばれる (Ross, 1998. p.7; Carter, et al. 1998. p. 284)。

以下、「質の格率」の違反という視点から、これらが具現されたテキストとリーディング過程の関連を順次述べてみたい。

#### 4. 1. Incongruity

読み手があるテキストを読み進むさい、テキストの内容が首尾一貫性を持ち、結束性に問題がなければ、書き手の意図をほぼ正確に理解することができる。つまり、「質の格率」を書き手が遵守していることであり、リーディングは円滑に行われる。

しかしながら、現実のテキストはそのような無標 (unmarked) のものばかりではない。読み手の期待がしばしば裏切られ、意味不明とまでは行かないまでも、整合性を持たないテキストも数多く存在する。読み手にとって、テキストが意外性を持つと言っている。この場合、「質の格率」が違反され、「会話の含意」が創出されているのである。このようなテキストを読み進む読み手は、常に書き手の意図を推論、算出しなければならない。そして、このようなテキストは典型的にジョーク、ユーモアのジャンルに見られる。たとえば、次のユーモア話をよんでみよう。

- (2) (*Pilots in space ship*) It's no good, Dawson! We're being sucked in by the sun's gravitational field and there's nothing we can do! ... And let me add those are my sunglasses you're wearing!

(Ross, 1998. p. 29. 下線部筆者、以下同じ)

私たちは、外界世界に対する背景知識 (background knowledge of the world) をスキーマとして保持している。人が非常のさいには—このテキストでは生死に関わる状況—どのような発話をなすかをじゅうぶんに知っている。これが、第1、2文に続く第3文、

And let me add those are my sunglasses you're wearing!

(それに言わせてもらえば、君がかけているのは僕のサングラスだがね)

で見事に裏切られる。書き手側の「質の格率」の違反であり、深刻な内容にもかかわらず、思わず吹き出してしまう。「会話の含意」が、ユーモア話の「落ち(punch line)」となっている。

次にやや長いテキストをあげる。

- (2) Once when Jack Jones was in a movie theater, he noticed that the man in front of him had his arm around the neck of a large dog in the seat next to him. Clearly, the dog was understanding the picture, for he snarled softly when the villain spoke, yelped joyously at the funny remarks, and so on.

Jack leaned forward and tapped the man on the shoulder.

"Pardon me, sir," he said, "but I am astonished at your dog's behavior."

The man turned around and said, "Frankly, it surprises me, too.

He hated the book."

(Finger and Barnes, 1988. p. 3)

童話などの世界では、動物が人間の言葉を話し、人間とコミュニケーションを行う独特のジャンルを形成している。しかし、テキスト(3)は、そのようなジャンルではない。街のどこにもある現実の映画館の中での話である。そこで、イヌが、

he snarled softly when the villain spoke, yelped joyously at the funny remarks, and so on.

(悪党がなにか話すと低くうなり声をあげるし、面白いセリフには楽しそうにキャンキャンというのである)

というのは、話に首尾一貫性がなく、内容は明らかに不整合である。ここまでリーディングを行った読み手は頭をひねる。この話の書き手は、「質の格率」、

発話はできるだけ真実であるようにすること

1. 偽りと信じていることは言わないこと。
2. 十分な証拠に欠けることは言わないこと。

のどれにも見事に違反している。読み手は、創出された「会話の含意」を算出しなければならない。そして、最後の文の「落ち」、



He hated the book.

(やっこさん、本を読むのが大嫌いだったんでさあ)

は、もう1つの「質の格率」の違反—イヌが本を好き嫌いするはずがない—であり、ここで読み手はニヤリとするのである。

このように、"incongruity" を内容に持つテキストはユーモアのジャンルにしばしば見られる。そして、それゆえに笑いをさそうのである。こう考えてくると、テキスト(1)も、ユーモア話と読んでいいかも知れない。苦笑しながら、いまいましげに、

Great, that's just what I wanted!

と言っている様子が目に見えるようである。では、もう1つの特性 "hedges" とはどのようなことなのか。

#### 4. 2. Hedges

"hedges" とは、ある発話をする場合、断定的な言辞を避け明瞭に表現しない言語行動のことである。たとえば、

(4) The bus is late.

と言えば、疑う余地のない断言である。そして、「質の格率」を遵守している。しかしながら、このような断定をするには、100パーセント証拠が必要であり、話し手(書き手)にとって、その真実性にたいして相当の危険を冒す、かつ勇気のいる言語行動であるといえよう。したがって、通例は、

(4a) I think (I guess) the bus is late.

と発話するであろう。このように、'I think', 'I guess' などの語句を用いて断定を避ける表現方法が "hedges" である。これには他に次のような表現があげられる。

I feel

I believe

I hope

As far as I know  
 Now correct me if I'm wrong, but ...  
 I'm not absolutely sure, but ...  
 (cf. Carter, et al., 1998. p. 280)

これらは「質の格率」に違反した表現方法と考えていいであろう。「発話はできるだけ真実であるようにすること」ではなく、言質を聞き手（読み手）に取られないことをねらった、あいまいな表現と聞き手（読み手）には理解される可能性を持つこともある。では、この "hedges" が生み出す「会話の含意」とは何か。次のテキストを読んでみよう。

- (5) It might as well be admitted right at the outset: this is a book about *theory* of language teaching. This 'confession' may immediately put off some readers who have no truck with 'ivory tower' theoreticians, and who may therefore feel disinclined to read any further. But taking a chance on it, I hope that, in the chapters that follow, those who have this deep antipathy to anything 'theoretical' can be convinced that 'good teaching practice is based on good theoretical understanding. *There is indeed nothing so practical as a good theory.*'

これは、H. H. Stern の大著 *Fundamental concepts of language teaching*. (1983) の「序文 (Preface)」の冒頭第1パラグラフである。ここにおける、

It might as well be admitted right at the outset  
 (まず、当初に以下のことを認めてよかろうかとも思う)

taking a chance on it  
 (このさいあえて述べるが)

I hope that

は、すべて "hedges" とみなしてよい。もし、これらの語句を省略すれば、書き手の意図がより明瞭に、断定的に示された文章となろう。では、この「質の格率」に違反した "hedges" により、どのような「会話の含意」が創出さ

れるのだろうか。それは、一口で言えば書き手の学者としての良心を示す「誠実さ」ということであろう。ちなみに、私自身かつて、今は故人となられた Dr. Stern の講義、演習に1年間出席させていただいたことがあるが、実に真摯で誠実な人柄の学者であられた。

学問の世界にかかわらず、私たちは、発話する場合出来るだけ断定を避けようとする。それは相手との摩擦を起こさないという目的や、「そうではないでしょう」という反論をおそれるからでもあろう。しかしながら、それよりも自分の発話をできるだけ正確に、真実にそうよう述べようとする場合にも多く見られる。そして、これを逆の面から見れば、話し手（書き手）の「質の格率」を遵守しようという誠実な表現方法と理解できなくもない。また、これは「ていねいさの原則(Politeness Principle)」と相通じるものでもある。

テキスト (5) は、純然たる学術書というジャンルに属する。したがって、書き手（著者）が学問の世界を正確に誠実に記述しようとすればする程、"hedges" が用いられるのであろう。もちろん、過度の使用はいまいさを増すだけで、書き手の真意が通じなくなるということになるのは自明のことであろう。このように、言質をとられないようなあいまいな、ネガティブな言外の意味を持つ表現法も、重要な機能を果たす「会話の含意」を生み出すのである。

## 5. おわりに

私は、グライスの言う「質の格率」の違反から創出される「会話の含意」の諸相が、どのようにテキスト内に具現されるかを "incongruity"、"hedges" ということを軸に考察してきた。そして、それがリーディング過程とどのような関連を持つかを述べた。

ここで、私たちがすぐ気付くことは、人間の言語使用、言語行動の複雑さということである。不可思議さと言ってもいいであろう。私たちは、話し言葉であれ、書き言葉であれ、「歯に衣を着せず、率直のものを言う (call a spade a spade)」ということは稀にしか行わない。それは、対人関係を円滑に運ぶという目的もあろう。しかしながら、それよりも、私たちは、言語表現をより豊かなものにするという暗黙の言語機能の存在に思っていたのである。そこからユーモアが生まれ、また誠実な言語行動が聞き手（読み手）に理解されるのである。

なお、さきにわずかに触れた「質の格率」と「ていねいさの原則」との間に生起する「葛藤、衝突 (clash)」も重要な問題を含んでいる。このことにつ

いては、別に稿を改めたい。

### 参考書目

- Carter, R. et al. (1998) *Working with texts*. Routledge.
- Finger, A. G. and Barnes, G. A. (1988) *Let's laugh together*. Maxwell Macmillan.
- Grice, H. (1975) Logic and Conversation. In P.Cole and J.Morgan (Ed.), *Syntax and semantics, III: Speech Acts*, Academic Press.
- Roth, A. (1998) *The language of humour*. Routledge.
- Sanger, K. (1998) *The language of fiction*. Routledge.
- Stern, H. H. (1983) *Fundamental concepts of language teaching*. Oxford Univ. Press.
- Thomas, J. (1994) Conversational Maxims. In *The encyclopedia of language and Linguistics*. Vol.2. Pergamon.
- 千々岩佳史 (1991)「リーディングにおける Grice's CP」 *OTSUKA FORUM*. NO. 8. 大塚英語教育研究会。
- (1998)「グライス「会話の含意」より見た英語リーディング過程—Flouting the maxim of Quantity に関して—」 *OTSUKA FORUM*. NO. 16. 大塚英語教育研究会。

(岩手大学教育学部英語教育講座)